

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	三池文書考（肥後熊本東子飼町三池家所藏）：雑録
Author(s)	白水生
Citation	龍南會雜誌， 47： 38 - 47
Issue date	1896-06-08
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4934">http://hdl.handle.net/2298/4934</a>
Right	

又解拆學にては幾何學に必要なリアルとイマジナリーとを區別することを要せず、例へばの  $\| \text{S} \text{ or } \text{R}$  或はの  $\| \text{S} \text{ or } \text{R}$  の形の式にて曲線を現はすときに、 $\alpha, \beta$  が  $S$  に會するか或は會せざるかに關すことなく其交點を通ふる曲線を示すが如し。然れども注意すべきは、圓の系統の性質より之を射影して二のイマジナリーの點を共有に持つ圓錐曲線の系統の性質を推論することを得れども、一般の式より直に證明せずして二のリアルの點を共有に持つ曲線に及ぼすこと能はず、前述のトランスホーメーションの法は一系統のリアルの點を之に相當するイマジナリーの點に移せば適用せらるゝものなり。射影法を幾何的と代數的とに考へたるは幾何の法によりては先づ圓其他簡單なる形に就き證明し、次に一般の定理に推論し、代數の法によりては一般の定理も簡單なる形に就き證明せらるゝと同しく容易にして、先づ一般の定理を證し、後特別なる場合を研究するとの差異あればなり。

### 三池文書考 (肥後熊本東子飼町三池家所藏)

白 水 生

足利尊氏下知狀(建武三年)

可誅伐新田義貞與黨人等之由、所被下 院宣也、早相催一族、馳參赤間關、可致軍忠、於恩賞者、可有殊沙汰之狀如件

建武三年二月十七日

(尊氏) 花押

安藝 奎助 殿

按ずるに、これは建武三年二月西國下向の途中より下せざるもの也、安藝李助とあるは、當時筑後三池郡南郷の地頭たりし人にて、掃部頭中原親能の後なり、實名は貞鑒、其子を助太郎貞元といへり、父子共に安藝を名字とせるは、其祖親能の二男に周防守親實、文曆天福中に安藝の守護に補せられしによる、されど當時正玄く三池の地頭職なりしかは、大かたは文書などにも三池と見へたり、大友系圖

征西大將軍宮譜 正月十日尊氏都に入りてより、十六日園城寺の合戦あり、廿七日、八日、九日また合戦あり、尊氏利なくして丹波へ奔る、二月五日北畠顯家新田義貞攝州に向ひ、十三日櫻山合戦あり、尊氏兄弟困却の余り自殺せんとせしを、細川郷の律師諫めて九州に赴く、院宣とあるは後伏見法皇の下されし也、兼ねてより光嚴帝の即位を望み給ひ、右清水へ御願なとさへありしかば、廬山寺文事後 尊氏方よりかの院宣を申請ひしとも、いと易かりしなるべし尊氏の兵庫落の事、並に院宣到來の事については異説多々、或は正月晦日尊氏京軍にうちまけ、二月十二日兵庫を立ちて筑紫へ下りしに、備後の鞆にて持明院殿の敕使賢俊、來りて院宣を授けしといひ、梅松論 或は二月八日に兵庫を落ちしといひ、異本太平記 或は二月十三日に落ちしといふ、正統記元弘日記裏書 又は五月二日上洛の途中、尊氏嚴嶋に詣で三日參籠ありて結願の日に、三寶院の僧正賢俊京より來、後伏見法皇さる四月六日に崩じ給ひしが、いまだ崩御ならざるうちなされし院宣をもちきたれりともいふ、太平記 宮譜には梅松論の説を是とし新井白石は太平記の如く、上洛の途中の事なるべしといふ、讀史余論 下向の途中、播磨の室の津にて一兩日逗留し、こゝにて後を防がん爲め、四國中國に諸大名を残し留むべき由評議し、其手分なとせしが如くなれば、梅松論 備後の鞆につきしは、十四五日の頃なるべきか、其折しも院宣到來しければ、やがて九國の大名へ其よしかくとふれて、赤間關へ馳參るべき由下知したる也、征西大將軍宮譜 此時尊氏はす

でに、自ら征夷大將軍と稱せし也、

足利尊氏下知狀(建武三年)

菊池以下凶徒爲誅伐所發向也、相催一族急可致軍忠之狀如件、

建武三年三月一日

(尊氏) 花押

三池奎助入道殿

按するに、これは尊氏が九州の芦屋につきし翌々日出せし下知狀也、下に學ぐる文書によれば、助太郎貞元は、二月十七日の下知狀に従ひて、赤間關へ馳參られ、父の奎助入道のみ三池には残り居られしが如し、菊池以下の凶徒とは、菊池武敏以下の官方をいふ、武敏は武時の子、武時は去年三月博多にて、少貳妙惠大友貞宗等の爲めに殺され、其十二月武敏は、其仇を報ひんため大宰府に向へり、折ふし大友は官軍に加はりて、東國に向ひし留守なりしかば、少貳は之を防がん爲に、大友の宗徒の一族に託間といふを呼びたり、征西大將軍宮譜かくて十二月三十日に、託間は武敏が大宰府に向ふ途中に出向て防戦し、翌年正月八日には少貳が方より菊池に寄せて、今の菊池神社の在るころ也外城の一を攻落す、

託間文書貞政建武五四十八軍忠申狀

武敏はこれをやすからず思ひて、今度は阿蘇の大官司などを語らひ、重ねて宰府に寄せたりしが、少貳方には折ふし、嫡子頼尙に勢を付て、尊氏を迎へん爲に門司につかはしたれば、妙

惠はまた託間貞政と共に筑後にむかへ、二月廿七日太田清水にて防戦せしが、託間文書征西將軍宮譜利あらずし

て宰府へ引退く、武敏之を追ふて宰府へ攻め入り、少貳が館を焼拂らひし故、妙惠も力づきて内山

に引籠り、二月二十九日の曉に自害して失せたり、此日尊氏は少貳其他の大小名にむかへられて、

芦屋に着きしが、妙惠が討たれしこと、明る晦日に聞えしかば、三月一日と近國の未方へかくと下

知して、其翌日の多々良濱の合戦とはなれりし也、征西大將軍宮譚夢想記此合戦にて、菊池は思ひの外の大勢に出あひ、打負けて其まゝ國にかへりぬ、この三月一日の下知狀すなはちこれ也、

安藝助太郎貞元到着狀(建武三年)

(尊氏)袖判

安藝助太郎貞元、引率一族等、去月廿七日馳參長州赤間關候畢、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月六日

中原貞元裏判

進上御奉行所

按ずるに、これは安藝助太郎貞元より、將軍家の奉行所に捧けられし到着の届書也、全年二月十七日の尊氏の下知狀に、可誅伐新田義貞與黨人等之由、所被下院宣也、早相催一族、馳參赤間關云云、安藝奎助殿、とあれば此下知狀に従て、子息助太郎貞元父の代理として、一族を相催して赤間關に馳參われしと見えたり、少貳頼尙なども、此時尊氏を迎へん爲め馳向ひし也、凡そ當時の文書に、進上又は謹上とあるは、家格の卑き者より、高き者へつかはせしにて、進の字ハ謹の字よりも尊びたる用ひ方なり、こゝに進上とあるも、將軍家の御奉行所を尊びたるなり、裏判とは、已の署名の下に直に判をなさずして、文書の裏面にしるせしものにて、これも將軍家を尊びての仕方也、かくて奉行所は、これを請取りて、將軍にこの由申す、將軍の方にては承知せし由判を加へて、再び之を差出したる本人に返へすを例とす、常の式にては文書の終りに、この判をしるすべき定りなれども、將軍ハ無上の尊貴を有するものゆゑに、文書の首にこの判を捺す、これを袖判といふ、判といへるは、勿論華押としるべし、

足利尊氏下知狀(建武三年)

凶徒蜂起事、有其聞之間、所差遣仁木次郎四郎也、急馳向彼所、可致軍忠之狀如件、

建武三年四月二十日

(尊氏) 花押

三池 助太郎殿

按するに、これは尊氏九州より攻入る途中、長府より下せしもの也、尊氏が太宰府を發したること、或は四月廿六日といひ、或は四月三日といひ、太平記 梅松論一定せざれども、古文書などによりて考ふるに、いづれも誤にて、實は四月十日頃なりしが如し、征西大將軍宮譚多々良濱合戰の後、一色仁木などの働きにて、菊池をはじめ九州悉く平定しければ、尊氏は仁木四郎次郎義長等を留めれきて、急ぎ上洛せしやうに諸書に見ゆれども、太平記、梅松論以下諸書こはみな誤にて、此時まで九州は全く平定せず、四月十三日肥後國安樂寺の合戰あり、十六日鳥栖原合戰あり、託麻宗直軍忠申狀其前にも三月下旬に玖珠合戰あり、大友この文書合戰に、大友も一色も菊池が爲に破られ、武敏の勢強くなりしが、次の安樂寺鳥栖原合戰にて、武敏一色が爲に破られて、菊池に引退きたれば、一色は三月の玖珠の不利を殘念に思ひし時なれば、此度は日田へゆき、玖珠を襲はゞ爲に、筑前に引入りしなるべし、この時尊氏は長府まで來り居しが、安樂寺鳥栖原合戰の事聞えしかば、供奉し來りし仁木次郎四郎義長をば、一色が加勢として、長府より引返させしめし也、征西大將軍宮譚されば凶徒蜂起とあるは、菊池武敏以下を指せしものにて、馳向彼所とあるは、肥後菊池をさせしものとしるべし、

安藝六郎軍忠申狀(建武三年)

安藝六郎藏人入道寂順謹言上

欲早任軍忠給御判備將來龜鏡間事

右去月四月廿三日、長州赤間關御出之時令供奉、去月十六日、筑前國下座郡、筑後國鳥飼香子合戰之時、馳向菊池武敏以下凶徒等、拾一命抽軍忠上者、早賜御判爲備後證龜鑑、恐々言上如件、

建武三年六月 日

承了 華押

義長  
花押

按ずるに、これは安藝六郎藏人より、仁木義長へ差出されし軍忠申狀也、藏人入道とは、前に見えたる安藝奎助貞鑑入道の末弟にて、助太郎の叔父にあたる人也、仁木義長は尊氏の命にて、長府より引返して、博多につきたる後、武敏筑前に逆寄して下座郡まで打入たりしを、義長も馳向ひて防戦に及びしなり、この軍忠狀は、此の時の事をしるすものにして、義長の判を請ひて、後代まで傳へんとする也、承了とは、承知せし趣をしるす也、華押は義長が華押也、又按ずるに、この申狀は下座郡の下に、合戦の地名と、鳥飼香子原の合戦の日をしるさるる故に、兩所の合戦同日の如く見ゆ、且つ十六日の合戦の場所も明ならず、實は下座郡の戦地は三奈木原なり、筑後の竹野郡に鳥飼村あり、香子原も其近所ならんか、五月十六日はたゞ、三奈木原合戦のみをさすが如し、征西大將軍宮譜此合戦の後、義長が肥後に寄來りしこと聞えずして、今川藏人大夫といへる新名見ゆるは、尊氏上洛の後、山門京都の合戦ありて、義長を京へ召上し、其代として今川藏人大夫を下せしなるべし、かくて六月十七日一色は、今川をば肥後へ差向けし也、小代文書、義宗申狀、一色下知狀、征西大將軍宮譜六月晦日京合戦あり、八月廿五日阿彌陀峯合戦あり、仁木義長と今川範國とは、四の宮河原に向ひ、義長は松坂口、範國は三井路巡地藏に向て軍したり、難太平記、梅松論、征西大將軍宮譜されば此申狀は、六月上旬にて義長が未だ、九州を發せざる以前

のことゝしるべし、

高師直執達狀(貞和五年)

兵衛佐殿被下九州之由其聞候、就之自 將軍家、被下御自筆御書候、案文進之候、若餘手事候者、任法可有計沙汰候、且自關東近日御上洛候間、重可被仰候也、恐々謹言、

九月廿八日 武藏守 師直 花押

謹上 三池一族御中

按ずるに、これは貞和五年八月、京都の事變の後、師直よりつかはせしもの也、京都の事變とは、直義師直不和を生じて、政府の改革ありしをいふ、兵衛佐とあるは、直冬をさす、これハ尊氏が忍びて一夜かよひし越後局の腹に出来し也、相摸東勝寺の喝食なるを、男になして京へ上す、直義の嗣となり、去年五月紀州の官方起りし時、右兵衛佐となりて大將を給はり、今年四月直義のはからひにて西國の探題となり、備前まで下りし也、或は長門に發向し、彼國にて八箇國の成敗を掌るといふ、圖太この時京都にては、尊氏政を直義に委ね、其家に政所を開きて、上杉重能を執事とす、師直軍功ならびなかりしかば、重用せられ尊氏の執權となり、師泰は諸國にいで、戰を督し、尊氏の一族文武の要職に當りて、威權直義を壓せんばかりなりしかば、重能直義にすゝめて、師直を殺さんどせしが、事あらはれ、八月師直弟の河内にあるを迎ふ、圓心則祐等も、又師直が宅に來りしを、師直これ返して、直冬の備前より上らむとするを防ぐべしといふ、この時洛中に集る軍勢五萬七千余の中、直義に従ふ者七千に過ぎず、十三日師直父子、尊氏直義をかこみしかば、今よりは直義に政道いゝるはすることなく、上杉畠山は流罪に處すべしと定りて、事おさまる、直冬は韃にありしが、師直近



國の地頭御家人等に、直冬をうつべき由いひしかば、おし寄す、かろうして九州に落ちゆきたり、  
太平記、梅松  
論、園太磨 關東より義詮を急ぎ上洛せしめて、政道を行はしめ、師直諸事を申沙汰すべきに定りた

れば、師直がこの執達狀をいたせしときは、其威勢ならびなかりし時なり、將軍とあるは、尊氏な  
り、自關東近日御上洛云々とあるは、義詮をさす、十月四日に鎌倉を立ち、廿二日に入洛し、廿六日  
三條坊門高倉直義の家にて、政務執行の沙汰始あり、直義は害せられんことを恐れて、十二月八日  
出家す、上杉畠山は、配所にて師直が爲めに殺されたり、さればこの將軍家御自筆とあるも、師直が  
申請ひしものなるべし、

足利尊氏下知狀（觀應元年）

直冬誅代事、早令發向彼在所、可致忠節之狀如件、

觀應元年四月廿七日

（尊氏）華押

三池兵庫助殿

按ずるに、これは師直が將軍にすゝめていたさせし也、觀應元年は、貞和五年の翌年也、この時直冬  
は九州にありて、少貳頼尙等之に附きたり、されど師直か所爲としりて、うつものなかりしかば、師  
泰六月二十日に發向す、かゝる所に、九國二嶋直冬に属すと聞ひしかば、師直將軍にすゝめ征伐せ  
しむ、十月廿八日發向あるべしと聞ひし前の夜、直義逐電す、これは師直が、こよひ竊かにうちて、  
西國に向ふべしと、計ふと聞えしが故なり、師直はさかして後に、發向すべしといひしか、尊氏用ひ  
ずそのまゝ發向す、太平記には、師直を發向せしめし由見ゆ、いづれにしても、かの下知狀に従ふ者  
なかりしかば、師泰の發向ともなり、尊氏の發向ともなりしとしるべし、兵庫助とあるは、前に見ゆ

たる貞元のこと也、

三池助太郎軍忠申狀（正平六年）

正平六年九月廿九日、馳參肥後國肥猪原而、同十月一日關城合戰之時、以賴親若黨等、攻入于當城西城戸口、令退落之次第、御見知畢、其後供奉于筑後國藩口城、令在陣于瀬高上庄而致警固畢、任傍例賜御判、爲備後證、粗言上如件、

正平六年十月十八日

藤原賴親花押

進上御奉行所

承了花押

武光  
花押

按するに、これは正平六年肥御國合戰の後、三池助太郎賴親より、征西大將軍宮の御奉行所へ上られし軍忠申狀也、賴親とあるは、前に見えたる貞元の子にて、奎助貞鑑の孫也、貞元其頃は官途して兵庫頭と名のられしゆゑ、賴親また父の假名を襲て、助太郎と名のられし也、父は中原にて子は藤原を冒されたる、心得かたく見ゆれども、もと三池の祖は、掃部頭中原親能の子にて、この中原親能の猶子に、豐前守能直とて、右大將家に仕へて殊の外昇進せしが、いかなるよしにか姓を中原と改めずして、もとの藤原としたり、其子孫大友家、代々一國の守護となり、貞載氏泰が時になりては、筑紫にて少貳大友並稱し、兩家ながら探題ともいひつべき勢にてありしはどに、おのづから一家の宗長となりたる故、一族大かたは本姓の中原を改めて、皆藤原となりたれば、三池家にては、賴親の時に初めて藤原と改められし也、三池家系圖、志賀文書、征西大將軍宮證 正平六年は北朝觀應二年にて、此時九州は宮方將軍方佐殿（直冬之事）方と、三つに分れたりしが如し、尊氏師直等昨年、直冬征伐の事を思ひ立ちし

かど、直義南方へ参りて京畿亂れ、其事も中途にて止みしかば、九州にて直冬の勢盛に、肥後國にても、川尻託麻など佐殿方して、鹿子木大炊助を攻めしこと見ゆれば、鹿子木などは其比は宮方にて、三池もこれと親しき一族なれば、同じく宮方に参りてありしと見えたり、太平記、征西將軍宮譜肥猪原は、今の肥猪町あたりの原にて、關城は今の南關北關などいふ間なり、溝口は筑後國上妻郡、瀬高は下妻郡なり、いづれも少貳頼尙にいざなはれて、佐殿方したるものゝ構へ居たるところ也、關城合戰の時は、宮もみづから向はせ給ひて、それより直に筑後へ打入らせ給ひて、溝口城を攻給ひ之也、此時は宮ハ先づ菊池を出させ給ひて、關城を攻めんとて肥猪原に御陣をめされたるに、頼親は御催促をうけておくれて馳付られし也、上妻城落ちし後、宮は引返之給ひ瀬高上庄に御逗留ありて、其あたりを沙汰し給ひしが如し、警固とあるは此時のことなるべし、此時菊池は武光の時にて、此時武光も御供して向ひしなるべし、承了とある下の花押は、武光が花押也、征西大將軍宮譜

因云、三池家の文書は、これに限りたることにはあらねど、余白なければ、其中にて特に、史學上の參考に供すべきものゝ、重なるものゝみを擧げて、其余を略す、こゝに擧げたるは、建武三年より觀應二年に至る、十八年間のものにして、いづれも足利初代の大事に關せるもの、年代の順序に排列したり、又云、本編中に引用せる征西大將軍宮譜は、魚住家の所藏にて、三池助教の好意によりて、之を見るを得たり、謹で之を謝す、

## 登靈山城跡

東籬園主人

往昔漢の武帝、嵩岳に登て仙人に遇ひ、能く修齡の術を得たりと聞く、吾今靈山に登らんとする、豈仙